

今年もワタクの冬の祭典がやってきました。コミケですね！ 私は根つからのワタク野郎なのでコミケだというそれだけでうきうきわくわくでかてがです。今年の冬インテガラの参戦だったGKですが、よい読者さんやお友だちに恵まれワタク的には素敵な一年になりました。来年もどうぞよろしくお願いたします！

今年一番最後の日

その日はびっくりする程の大荒れの天気だった。大晦日から羽田までは実家に帰るといふ世良は、朝うんざりした様子で羽田に向かう。

堺はけだるい身体をおして玄関先で切ない背中を見送る。チームには30日から実家に帰るといふもうもないウソをついているらしい。実家に直接連絡がいくことなどほほないだらうが「もしものことがあったらどういわけするつもりだ？」と、前夜旅行鞆を抱えて現れた世良に苦笑したものだ。

納会のピンゴで当てた「松坂牛のステーキ肉二枚で三万円相当」を持参していたから、夕べはちゃんと歓待してやった。堺が当てたのは、どきつい色と香りの入浴剤のセットだった。試しにひとつ使ってみたらお湯が真紫になり、ペーパーの泡まみれになった。夕べの話だ。世良はもちろんだらう。そのせいかは知らないが、風呂場の段階からいつになく盛り上がったのはおいておく。

世良がいなくなった部屋の中、堺は「よし」と息をつくと、部屋の掃除をはじめる。

部屋中のファブリックを集めて洗濯機に放り込んだ。外は水雨が徐々に構限りになってきた。この後もっと気温が下がるというから、その内吹雪くがもしれない。

それでも風の様子を見て堺は窓を全開にして空気を入れ換えた。家事は一生懸命やるといふ運動になる。

世良が置いていった雑誌や、ゲーム類を片づける。ほんの数ヶ月で部屋の中にすいぶん世良の気配が増えている。テーブルの上に放り出しておいた携帯が鳴る。堺は手を止めて、電話をとった。

実家の母からだ。「……時間？ 今日の夕方……六時過ぎかな。ああ、今日はそっち泊まるけど、元旦には戻る。自主トレがますます必要な年齢なんだよ、わかるだろ？ あと、なんか昨日ピンゴで入浴剤のセット当てたから。母さんと姉さんたちで分けるよ。有名なところらしいから。俺はいらねえよ。ああ、わかってる。運転にはちゃんと気をつけるから」

母との会話を続けながら、掃除の手は止めない。

堺の実家はここから車で一時間ほどの場所だ。毎年、大晦日に帰って元旦夜にはマンションに戻るのが恒例だった。

母は「連れ帰ってくるカノジョいないの？」と笑って探りをいれてくる。身内ならでは鬱陶しくもありがた迷惑な心配だと、堺は笑った。

「結婚は考えてないって。こまできたらもう、するとしても引退してからじゃないか？ もう、姉さんたちに子どもがいるんだから俺の子どもはいいだろ？」

少なくとも、今の相手とは結婚だ子どもだといふあたりは実現できるわけもない。

「ああ……じゃあ、切るよ。また後で」

通話ボタンをオフにすると、妙なため息が出た。

外はますますひどい天気だ。重く垂れ込めた雲から降る雨はもはや完全に雪になっている。

「世良、大丈夫か？」

この分では飛行機の運航に大幅に影響が出そうな様相だ。テレビのニュースをつけると、年末でにぎわうターミナルステーションや空港の大混雑が映し出されている。

「ああ、大分ひどいなこれは……」

この時点でかなりの便に影響が出ている。欠航もほつほつ出始めている、羽田でうんざりした様子で客がインタビューに応じてる様子が流れていた。荒天はとうやら全国的なもので、天気図を見る限り沖縄と北海道の一部をのぞいてどこもかしこも大荒れの様子だ。

うなだれながらここを出た世良が上手く実家に帰れることを祈りつつ、堺はちょうどアラームの鳴った洗濯機からファブリック類を乾燥機に移しに戻る。

姉の子どもにやるお年玉の準備と、一泊の旅支度はその後だ。

頭の中でToDoリストを更新して、少し休憩を入れるかと堺はコーヒーを煎れた。

つげはなしにしておいたテレビでは全国的な荒天を受けて、ずつとし字型のワイフで交通情報や各地の気象情報が流れている。だんだん被害が広がりにかかっているようだ。

「……」

堺はテーブルの上から携帯を拾い上げると、メモリから世良の番号を呼び出した。

テレビの画面には「本日の羽田離発着便は全便欠航が決定」という短い文章が出ている。世良は空港についてたかどうかという時間だった。

世良は三度目のコールで電話に出る。

「……ああ、世良か？ 羽田全便欠航って出てるぞ？ 大丈夫か？」

「堺さん、そうなんすよ。羽田ついたらほとんどの便が欠航になって、カウンターで空港の人と話をしている間に俺の乗る飛行機もなにもかも全部アウトになっちゃって……」

声がけんがししている。後ろでは誰かが怒鳴り散らしている声も聞こえる。年末の空港で全便欠航を知らされた乗客たちの情りが伝わってくるようだった。

「今日はもう仕方ないって、新幹線で帰ります。なんとかが今からなら今日中につくとおもうし」

「そうか。この分だと新幹線もさぞうだけどがんばれよ」

「っす！ 心配してくれてうれしいっす！ 三日の夜には帰るんで、それまで待っててくださいね」

「……年にそう何度も帰れるわけじゃねえんだから、ゆっくりしてこいよ」

「実家だと俺、一番末っ子なんて肩身セマインス。あんまり長くてももてあそばされるだけっていうか。それに、早く堺さんに会いたい。堺さんも、今日帰るんすよね？ 車、気をつけてくださいな」

騒がしい空港を歩きながら話す世良の姿が目につく。 「こっちはまだそこまで吹雪いてないからな。昨日一応スタッフレス隠がせだし安全運転で行くから平気だろ。てもまあ気をつける、ありがとな」

じゃあ、と言って電話を切った。

新幹線は間引きの徐行運転だが、なんとか動いているらしい。天気予報図はどこもかしこも絶望的な様子で、堺はちらりと世良の今日の離儀を思い浮かべたのだった。

(まあ、なんとか行けるだろ)

現代の日本で、国内を移動するのに当日中にたどり着けないということもあまり考えられない。世良も子どもでもないのだからなんとかなるだろう。

堺はテレビを消して立ち上がり、帰る支度に取りかかると、リビングの出口で消えたテレビに振り返る。

(大丈夫……だよな？)

なんとなく不安心は拭えなかった。

三時間後。家の中はほぼパーフェクトに整えた。

世良からの電話はない。

(大丈夫か？)

ニュースは各地の大荒れの大晦日を伝えていた。

「……」

堺はテレビの画面に映った情報を確認すると、迷わず携帯で電話をかける。

「……世良か？ 今、どこだ？」

テレビには東京から出発する全ての新幹線が現在運休、最寄りの駅でストップしているというテロップが流れていた。東京駅では新幹線のホームに入りきれない人たちがコンコースにあふれ出ている、子ども連れの女性が疲れはてた様子でインタビューに応じていた。

世良は今度は2コールで電話に出た。新幹線にはグリーンをフンパツしたおかげでなんとか座席は確保できたものの、その後全く発車せず、動いたと思ったら停車を繰り返して現在新横浜に停車中らしい。

「こままでで一時間がたってんすけど。これはもう諦めるべきかなあってようやく決心がかったとこっす。あと、東海道線で地道に行くとか」

「東海道線もそろそろヤバそうぞ」

目で拾った情報を伝えると世良が向こうでうなづいている。

「……察に戻るのが一番つらいっすね。申告なしけど交通完全ストップだからわかってもらえ……」

「お前、昨日から実家に帰ってて、もう東京にいないって設定にあつてるんじゃないの？」

「あ……」

絶句する。寮住みの若手は年末年始の居残り予定を前もって申告するのが義務となっており、世良は昨日そのソファで得意げに「今日から実家帰ってることになりました」と言っていたのを覚えていた。

「あー……これで帰るの、大ピンシユクッス、よねえ……」

「だろうな」

「仕方ない。この辺でホテルとります……明日になればいくらなんでも動くっすよね……」

堺はため息をついた。

「新幹線降りて駅ビルのカフェにでも入ってろ」

「え？」

「迎えに行つてやるよ。2時間くらいあればそっちつくだろう。今日はウチに泊まれ」

電話向こうが一瞬沈黙する。それから、絶叫が聞こえた。

「だ、だめっす！ 堺さん、戻って今日帰省するんすよね？ じゃあだめっす。親御さんに顔見せあげてください」

「近いんだから、いつでも帰れる。気にしないでいい」

「でも！ 今日大晦日で明日新年っすよ？ 堺さんのお両親もきつと堺さんの顔見たいに決まってるさ」

(けど、お前がひとりになるだろうが)

当たり前でそう思った。

「あつちは姉ちゃんどこの子どもの顔が見たらそれで満足なんだからいいんだよ。いいから、店入ったら連絡しろ。携帯の充電平気か？」

「あ、この車両コンセントあるやつだったんで。今、知らない人の分も充電請け負ってるくらいっす」

それを聞いて堺は苦笑する。

「お前らしいな。じゃあ、今から出るから。近くまで行ったら連絡する」

「堺さんっ！」

「あのなあ。俺んちで年越しのそんないイヤか？ 何にもないけど、一人でいるよりましだろ？」

あとはもう返事を聞かずに通話ボタンを切る。

駐車場に向かいながら、母親に「今日は急用ができていけないかった」と短い電話をした。

「ええ？ おせち、あんたの分も用意したのに。あと肉。しゃぶしゃぶのお肉、良則抜きじゃこんな食べれないわよ」

「悪い。知り合いがこの悪天候で帰省できずに立ち往生してる。今日、そいつを家に泊めてやらないとはいけなかった。明日の昼過ぎにはそっち行くから。おせちとしゃぶしゃぶはそんな時食うよ」

しゃべりながらもうエレベーターホールにたどりつく。

「あら、彼が？ 構わないから連れてらっしゃいよ。良則が今おつきあひしてる人がどんなコが知りたいわ」

思わず苦笑してしまう。

「……やめとくよ。彼がっていうか、チームメイトだよ。俺より大分若いからばかみたいに食うぞ？ 肉足りなくなるから、きつと」

「あら、別にいいのに。未だにあんたが高校生くらいの時の感覚が抜けなくて毎年買い込みすぎちゃうのよ。それにしても……良則が後輩選手の面倒見がいいなんて、意外だね」

母親は気合よく笑う。堺は「まあ、俺は怖い先輩選手だからな。そんなヤツの実家に招かれたらあいつ、多分緊張すぎて血管切れるだろうな。だから……また今年な。エレベーター乗るから切るよ？」と用心深く言葉を選んで言った。

母ははじけるように笑うと「じゃあ、明日待つてわね。かわいがるてる後輩くんによろしくね」と引き下がってくれた。

「良則がお兄ちゃん風吹かせる相手ができるとは、長生きするもんだね」

切る直前にしみじみとつぶやいた母の声はしっかりと耳に届いて、堺を一段と苦笑させる。

新横浜までは予想より30分は早く到着した。少し、飛ばしたかもしれない。

「堺さん、ホントすみません。けどマジ、助かりました！」

吹雪の中車のあるところまで走ってきた世良は、今朝別れた時と何一つ変わっていない。

「実家に帰るはずだったからホントに何も家にねえぞ。どこが途中で寄って買い出ししてくか」

「っす！ 俺、金出します」

新年まであと数時間だ。

車の中は暖房で暖まっている。世良が隣にいる。

「あー、けど。堺さんと正月迎えられんのはうれしい」

臆面もなく世良が言う。

「年越しちゅーとが、ひ、ひめ、ひめは……」

「俺の母親に今日帰れないって言ったらぶつぶつ文句言われたぞ」

もしもしながらとんでもないことを言いかけた世良に遠慮なく冷水を浴びせてやる。途端に世良は顔色を変えた。

「げ。やっぱそうっすよね。あの、羽田で買ったおみやげあるんでもしよがたらそれ……」

堺は「いらねえよ」と言って笑い、アクセルを踏む。

「そのかわり、今度連れていくから、俺の代わりに謝れ」

「……は……！」

隣の世良が絶句した。